あ と が き

高校教育研究は，昭和26年７月10日に第１号が発刊されて，本号で第61号を数える。第１号発刊当時は，高校教育に関する研究はほとんどない状況であった。附属学校は，実験・実習校であり，その使命を達成するために，研究紀要「高校教育研究」を世に送り出すことになった。

最近では，Super Science High Schoolに代表されるように，様々な教育機関で研究会が開催され，研究紀要が発刊されており，高校教育に関する研究が盛んに行われている。しかし，小・中学校に関する教材や指導法に関する研究は，教育学的に十分に検討され，研究されているのに対して，高校におけるそれは理論的な裏づけが難しく，実践報告に留まっていることが多い。本研究紀要においても同様ではあるが，これからも実践を積み重ね，大学・学類と協力することにより，より学問的な研究や実践報告を行い，高校教育に少しでも寄与していきたい。

第１号発刊以来，発行所を「附属高等学校内　高校教育研究会」と称してきたが，改めて高校教育研究会を設置するまでもなく，附属高校全教員が研究に携わり，実践していることを考え，本号から発行所を「金沢大学附属高等学校」と変更することにした。この機会に，「高校教育研究」第１号を発刊した当時の思いと，高校教育に携わる者としての心構えを再認識するために，当時の「発刊にあたって」を原文のまま以下に紹介する。

（川谷内　哲二）

発刊にあたって

わが校が野田の兵舎跡に呱呱の声をあげてから満四年になる。敗戰後の社会的混乱と物質的窮乏の中で，机と椅子だけの教育から出発して，とにかくも今日に至るまでには小池初代主事を中心とした創業の苦労は大きなものであつた。

もちろん十分の設備などは今なお望むべくもないが，われわれは一應こゝに創業期を終えて今や建設期へ入りかけたものと考える。従つてわが校の教育的営みもまた創業的整備の段階から，実験学校としての使命達成の段階へその重点を移そうとするものである。わが校は従來少人数の生徒を中学と高校の二本建にしていたのであるが，來年度からは高校一本となることになつている。このこともわれわれの使命達成のための一つのよき條件である。

六三教育の発足以來新教育の研究がさかんに行われ，教育研究書・教育雑誌の刊行も多種多様のはなやかさである。原理においても方法論においても，またそれが論文であろうと調査報告であろうと，その多くは小・中学校の問題をとりあげていて，入学試験に関する問題を除けば高校教育について頁を割いているものはきわめて僅少である。これは高校教育に問題がないことを意味するものではない。むしろ高校教育の困難さに原因しているのである。教科内容の高度性・選択教科制の煩雑さ・この年齢層が有する心理的な特殊性等から來る高校教育の複

雑さ困難さはわれわれに幾多の問題を投げかけている。たゞ今日まで高校教育に包蔵されている幾多の問題に向かつてとり組んで行こうとする人が比較的少かつたのではなかろうか。

わが校においては高校教育の正しい在り方を求めて日々の努力を重ねて來た。そして今回われわれの小さな歩みの跡を記録して江湖の批判を仰ぎ御指導を得んがため機関誌「高校教育研究」なる小誌を世に送ることゝし，いまその創刊号「教科書のあり方特集」を出すの運びに至つたのである。その歩みは幼いものではあるが，高校教育への限りない探求とその実践とを使命として，地道にこの道を進みたいと思つている。そしてこの歩みとともに本誌が号を重ねて成長し，やがて高校教育界に何らかの寄與をなし得る日の來ることを切に念願するものである。(1951. 6. 30)

主事事務取扱　川　西　友　吉